



教材「私の受けてきた教育」（山川菊栄）テキスト をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2025-04-11 キーワード: 作成者: 佐野, 比呂己, 佐野, 理美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000497

教材「私の受けてきた教育」(山川菊栄) テキストをめぐって

佐野 比呂己¹・佐野 理美²

¹北海道教育大学釧路校国語科教育第一研究室
²北海道厚岸翔洋高等学校教諭

A study on the Text of "Watashi no Uketekita Kyouiku"

SANO Hiromi¹ and SANO Satomi²

¹Japanese Language Education First Laboratory, Hokkaido University of Education at Kushiro

²Akkeshi Shoyo High School in Hokkaido

1 研究の経過

稿者は「柳田国男監修高等学校国語科教科書における記録(1)——単元「生活と記録」を中心に」(『国語論集18』令和三年(二〇二二)三月 一—三頁)で、「記録」という観点からその構成を提示し、その特徴、学習のねらいを明らかにした。

その中で今後の課題について、次のように述べた。

「教材について」の項では各教材についての詳述は避け、概要と教材の意義を簡潔に述べることにとどまった。当然、教材についても詳述し、単元「生活と記録」との関係についても言及すべきであろう。(八頁)

本稿は、この課題を受け、単元「生活と記録」所収「私の受けてきた教育」(山川菊栄)のテキストについて原典と教科書¹⁾本文の異同表を作成し、教材

研究の基礎資料を提示しようとするものである。加えて、原典及び、その周辺の情報を調査し、どのような性格のテキストか明らかにしていく。

2 教材「私の受けてきた教育」の原典について

教材「私の受けてきた教育」については、単元「生活と記録」の他の教材と異なり、教科書中に原典の記述が見当たらない²⁾。

教科書の教師用指導書には、原典についての記述が確認できる。

この教材は雑誌「教育」(一九五〇年一月号 世界評論社刊)に掲載された「私の受けてきた教育」に、筆者が特に本教科書のために加筆されたものである³⁾。

『教育』第四巻第一号(世界評論社 昭和二十五年(一九五〇)一月 九〇

一九八頁)に同名の文章が掲載されている。そこに山川菊栄が「特に本教科書のために加筆」したものであるという。柳田国男と山川菊栄の強い関係性がうかがえる。

『教育』第四巻第一号の目次は次の通りである。

一つの人間像を(笠信太郎)
時の行進

アメリカにおける社会科論争(周郷博)

教育ジャーナリズムの展望(平田与一郎)

ノーベル賞と日本の学界(菅井準一)

対日講和をどう考えるか(堀江忠男)

(座談会) 教育界における近代と前近代

(丸山真男・飯塚浩二・玉城肇・上飯坂好實・奥田美穂・宗像誠也・宮原誠一)

文化と人文科学ランジュバン教授の教育観(小場瀬卓三)

機械を使う農業 東京都西多摩小学校『伸びゆく村』より(福島要一)

中国人民教育の師・陶行知先生(赤津益造)

教師の精神的環境(宗像誠也・勝田守一・古川原)

単元「概念を整理する」(吉田昇)

(隨筆) 貝殻追放について(渡邊一夫)

(書評)

『一年生の教室記録』石橋勝治著(依田新)

バックスターブラドレー『アメリカ初等教育概説』大田堯譯(宮坂哲文)

『性教育読本』羽仁説子著(宮本忍) 外国文献研究 教育文化史(仲新)

私の受けてきた教育(山川菊栄)

表紙には「座談会」のタイトルのみが示されている。「座談会」がメインと

考えていいだろう。目次を確認すると「私の受けてきた教育」は他のタイトル

より大きめの文字で左右に野が引かれ、注意をひくよう工夫がなされている。

最後に位置していることもあり、「座談会」に次ぐ位置づけとなっている。

『教育』第三巻第五号(世界評論社 昭和二十四年(一九四九)五月)の「編

集後記」に編集の柱と「私の受けてきた教育」の位置づけが示されている。

★本誌のたてまえは、教育理論雑誌である。しかし、理論といっても

理論でございとお高くとまる理論ではない。学校における、職場にお

ける、地域における日常的教育実践に役立つ、切れば血の出るような

理論を提供するのが本誌の使命である。そのような理論を編集する本

誌の立場は、社会の改造に参加する教育という立場である。

★本誌の編集は、目下のところ、六本の柱を立ててやつてい

る。第一の柱は、論文またはシムボジウムでここではないといったような立場

からの主張を押しだしていく。(略)

★第二の柱は、教室における日常活動に役立ついわば実用的理論記事

である。(中略)

★第三の柱は外国文献研究で、(中略)

★第四の柱は〈時の行進〉で、これは教育関係者が関心と理解をたも

たねばならぬ教育およびその周辺の時事的問題を取り上げて解説する。

(中略) 第五の柱は中間読物で、これはたのしい教養のページにした

い。本誌では、長谷川如是閑氏のもの、(中略)がこれに当る。「私が

受けてきた教育」は当分続けるが、こんな人を書いてもらいたい、と

いうご希望があれば承りたい。第六の柱は〈教師のための書評〉で、(中

略)

★以上、六つの柱は、巻頭言《われらの問題》を加えて、編集の骨組

みとしていのである。(後略)⁽⁴⁾

『教育』(世界評論社) 誌は「教育理論雑誌」であり、「日常的教育実践に役

立つ、切れば血の出るような理論」を提供することが使命であるとしてい

る。

「私の受けてきた教育」は「第五の柱」の「中間読み物」であり、「たの

しい教養のページ」を指したものである。

「私の受けてきた教育」は、『教育』第三巻第四号(世界評論社 昭和二十

四年(一九四九)四月)より連載されている

私の受けてきた教育 地方の小学校時代(藤森成吉)

昭和二十四年(一九四九)四月

私の受けてきた教育(長谷川如是閑)

昭和二十四年(一九四九)五月

私の受けてきた教育 おもかげ(富本一枝)

昭和二十四年(一九四九)六月

私の受けてきた教育 小学校から中学校(兼常清佐)

昭和二十四年(一九四九)七月

私の受けてきた教育 (日夏耿之介)

昭和二十四年(一九四九)九月(八月号合併)

私の受けてきた教育 遅い青春 (林麟)

昭和二十四年(一九四九)十月

私の受けてきた教育 (川上嘉市)

昭和二十四年(一九四九)十一月

私の受けてきた教育 (武者小路實篤)

昭和二十四年(一九四九)十二月

私の受けてきた教育 (山川菊栄)

昭和二十五年(一九五〇)一月

私の受けてきた教育 (岡田武松)

昭和二十五年(一九五〇)二月

山川菊栄の文章は、この『教育』第四卷第一号(世界評論社 昭和二十五年(一九五〇)一月)に掲載されている。「新年号」とも表記されており、特別号での掲載ということになる。

●「私の受けてきた教育」異同表

『教育』第四卷第一号(世界評論社 昭和二十五年(一九五〇)一月)	柳田国男監修高等学校国語科教科書
<p>私の生れたのは一九〇〇年、明治廿三年のことで、私には四つちがいの姉、二つちがいの兄、四つちがいの妹がありました。昔のことで母は総領というものを重く見ていました。それで総領だった私の姉は子供のうちからひとり特別にきびしく、そして総領としての強い責任感を持つように育てられました。母は九十一で一昨年になくなりましたが、晩年の述懐に「始めの子をきびしくしつけておけばあとの子は自然それについていく。そのつもりで初めの子は特別にきびしくしたからあとの子は楽だった」と言っていました。母より十五年も前に亡くなった私の姉は、子供の頃、友達がさそいにくても、弟や妹をつれてでなければ遊びに出して</p>	<p>【四五頁】 私の生れたのは一九〇〇年、明治二十三年のことで、私には四つちがいの姉、二つちがいの兄、四つちがいの妹がありました。昔のことで母は総領というものを重く見ていました。それで総領だった私の姉は子供のうちからひとり特別にきびしく、そして総領としての強い責任感を持つように育てられました。母は九十一で一九四七年になくなりましたが、晩年の述懐に、「はじめの子をきびしくしつけておけばあとの子は自然それについていく。そのつもりではじめの子は特別にきびしくしたからあとの子は楽だった。」と言っていました。母より十五年も前に亡くなった私の姉は、子供のころ、友だちが誘いに来ても弟や妹を連れてでなければ遊びに出して</p>
<p>もらえず、また末の妹をおぶわされて、ほつれ毛が赤ん坊の目にはいらぬように手拭で鉢巻をして額のところを結んでおかれる。あの頃は女中も二人、書生もいたのになぜあんなにまですたのか、その姿で友達と遊ぶはずかしさに外も出られなかつた、とよく話していました。</p>	<p>【四六頁】 もらえず、また八つ年下の末の妹を負わされて、ほつれ毛が赤ん坊の目にはいらぬように手ぬぐいではちまきをして額のところを結んでおかれた。あのころは女中もふたり、書生もいたのになぜあんなにまですたのか、その姿で友だちと遊ぶ恥ずかしさに外も出られなかつた、と</p>

3 原典との異同について

原典と教科書本文とを比較すると、表記・表現の異同が多々見られる。教材化に際しては、山川菊栄が「特に本教科書のために加筆」したとしているが、加筆とともに削除している部分も見られる。原典を上段に、教科書本文を下段に示し、それらを一覽できるように作成した異同表を左記に掲げた。表現の異同等、加筆した箇所については、該当部分をゴシック体で示した。中段の○数字は教科書本文の該当頁の行数を示す。尚、原典については旧字が多く用いられているが、適宜新字に改めた。この異同表は、教科書の記述からだけでは理解しえない「私の受けてきた教育」の真意に迫る基礎資料となるものである。

姉は小学校から専門学校を出るまで総代を欠かしたことの無い模範生でしたが、習字のお清書などは甲上ばかりだったといつてよく、たまたま申下などをとつてくると叱られたとい
 います。小学校の時から家では母が姉と兄とに論語の素読や英語のリーダーを教えていま
 した。私はランプの灯の下で、母が娘時代、明治の初めに使つたらしい、古ぼけたリーダーを
 前にして姉たちに教えていた姿を夢のように思い浮かべることが出来ます。姉は隣で裁縫を
 近隣で茶の湯も習わされ、また女学校の上級になると、英語の個人教授をうけにも通い、明
 治卅五年津田へ入学しましたが、これらすべて母のお膳立通にはこんだわけです。隣の家に
 は水戸藩の儒者であつた母の父がすんでいて、私の姉と兄とに十歳前後から漢詩を作ること
 を教え、夜などよく女中を迎えによこしては二人に歴史の話などをするのを楽しみにしてい
 ました。

姉は十一歳のときはげいしいンフルエンザに冒され、一年休学しましたが、退屈して仕方
 がないので本をあてがわれた。その頃の子供は今よりむつかしいものをよんだとはいへ、註
 も

なにもない古今集をいきなり渡されたには途方にくれたようです。むつかしくて分りませ
 ンとか、教えてください、とかいうと、そんなことでどうする、わからなくてもいい、よんで
 さえいればぜんわかってくる、読書百べん意おのずから通ず、というきまり文句をきかさ
 れるだけで、母は一切姉の訴えに耳を貸さなかつたといひます。

しかし姉の退屈を慰めるためにこの頃から多分二、三年つづいたのではないかと思いま
 が、久しい間、夕飯後にその頃博文館から出た帝国文庫の呉越軍談、漢楚軍談、三国誌をよ
 んで聞かせていました。私には話がわからないのがもどかしくて堪りませんでした。姉と
 兄とは夕飯がすむのをまちきれないようにしてせがんでよんでもらい、もうやめるとい
 を「もつと、もつと」とのばしてもらつていました。そして食卓の話題はそれらの本の中
 出てくる英雄のことでもちぎり。私は何のことかわからないながら曹操はえらいがに
 らしく、玄德はおとなしくていい人だがじれったく、孔明の死ぬのが残念で残念で堪らず、
 とにかくあゝという本が早く分るようになっていきました。私がそれらの本を息もつかず
 によんだのは十二、三になつてからだったと思います。

博文館の『少年世界』も毎月とつていたので、兄と姉とは夢中でした。森田思軒や依田学

④ よく話していました。

⑤ 姉は小学校から専門学校を出るまで総代を欠かしたことの無い模範生でしたが、小学校の時
 から習字のお清書などは甲上ばかりだったといつてよく、たまたま申下などをとつてくるとし
 かれたといひます。家では母が姉と兄とに論語の素読や英語のリーダーを教えていま
 した。私はランプの灯の下で、母が娘時代、明治のはじめに使つたらしい、古ぼけたリー
 ンをして姉たちに教えていた姿を夢のように思い浮かべることが出来ます。姉は余暇に裁縫や茶の
 湯を習いにやられ、また女学校の上級になると、英語の個人教授を受けにも通い、明治二十五
 年津田へ入学まで、すべて母のお膳だてどおりに運んだわけです。隣の家には水戸藩の儒者で
 あつた母の父が住んでいて、私の姉と兄とに十歳前後から漢詩を作ることを教え、ふたりが一
 所懸命に作つた詩に朱筆を入れたり、毎晩のようにふたりを呼んで歴史の話などをするのを楽
 しみにしていました。

⑬ 姉は十一歳の時激しいインフルエンザに冒され、一年休学しましたが、退屈して仕方
 がないので本をあてがわれました。その頃の子供は今よりむつかしいものをよんだとはいへ、註
 も

【四七頁】

① 何もない古今集をいきなり渡されて、序文から読めと言われたには途方にくれたそうです。む
 つかしくてわかりませんとか、教えてください、とかいうと、そんなことでどうする、わから
 なくてもいい、読んでさえいれば自然わかってくる、読書百べん意おのずから通ず、というき
 まり文句を聞かされるだけで、母はいっさい姉の訴えに耳を貸さなかつたといひます。

② しかし姉の退屈を慰めるためにこの頃から多分二三年続いたのではないかと思ひますが、
 母は久しい間、夕飯後にそのころ博文館から出た帝国文庫の呉越軍談、漢楚軍談、三国志をつ
 ぎつぎと読んで聞かせていました。私には話がわからないのがもどかしくてたまりません。し
 たが、姉と兄とは夕飯がすむのを待ちきれないようにしてせがんで読んでもらい、母がもうや
 めるといひを、「もつと、もつと。」と延ばしてもらつていました。そして食卓の話題はそれ
 らの本の中に出てくる英雄のことでもちぎり。私はなんのことかわからないながら曹操は偉
 らしく、玄德はおとなしくていい人だがじれったく、孔明の死ぬのが残念で残念でたま
 らず、とにかくあゝという本が早くわかるようになっていきました。私がそれらの本を息も
 つかずに読むようになったのは十三になつてからだったと思ひます。

海の名が食卓でよくきかれましたが、私には小波の御伽噺が何よりうれしいものでした。母はまた古今、新古今の歌をよく口ずさみ、唐詩選の詩もよく歌っていた上、私の家には祖父の手

作りの、水戸時代からの唐詩選や新古今のかるたがあり、お正月にはこれをとることになっていたので、それらの詩や歌にはいつかひとりでなじみました。また私たちの家は祖父の建てたもので、二階も下も、襖というふすまには、能書だった祖父の手で、隸書や行書や草書で、祖父自身やその父や兄たちの詩がかいてあり、私たち娘三人と母とが寝起きした部屋のみすまもそれでした。その四枚のふすまには、祖父が若い時分、ある雪の日にその四人の兄弟が作った詩がそれぞれ書いてあり、雪の朝など、私は温いふとんに包まれたまま、母が次々とそれらの詩をさも楽しそうに口ずさむのを訳が分からぬなりに快く聞き入っていたものでした。

しつけとおしおき

私の母は茶の湯の形式はどうでもいいが、あれをやると動作がおちつき、戸障子を荒々しくあげたてしたり、皿・小蜂をガチャ／＼いわせたりしなくなるから家の中が静かでよい、というので私の子供のころは女中もませて、お茶の先生がきてはよくおけいこをしたものです。茶の湯をやると田舎出の女中もどたばた廊下を走ったりせず、お茶碗をこわすことがあまりなくなつたそうです。女中や女の子はもとより、兄までお相伴をさせられたものですが、兄はお菓子が出るとそれをつまんでスー

ツと消えてしまうので女中たちは笑いかみ殺すのに骨をおりました。私の父も不味公のお膝元松江の者で、家老の家に奉公中しこまれたので名人だつたそうですが、私は父のお手前を一度も見ただけではありません。

父も母も道具好きでしたが、そのせいか母は道具の扱いがやかましく、立居ふるまいや言葉使いもきびしい方でした。言葉については特に「はい」とか「いいえ」とかいうことをハッキリとということ、語尾をハッキリと、決して聞きがちがえられることのないようにいえることも言われました。今は一体に女でも言葉がハキ／＼していますが、私の子供の時代はハキ／＼しない

14 博文館の「少年世界」も毎月とっていたので、兄と姉とは夢中でした。森田思軒や依田学海の名が食卓でよく聞かれましたが、私には小波のおとぎ話が何よりうれしいものでした。母はまた古今、新古今の歌をよく口ずさみ、唐詩選の詩もよく歌っていた上、私の家には祖父の手

【四八頁】

1 作りの、水戸時代からの唐詩選や新古今のかるたがあり、お正月にはこれをとることになっていたので、それらの詩や歌にはいつかひとりでなじみました。また私たちの家は祖父の建てたもので、二階も下も、ふすまというふすまには、能書だった祖父の手で、隸書や行書や草書で、祖父自身やその父や兄たちの詩がかいてあり、私たち娘三人と母とが寝起きした部屋のみすまもそれでした。その四枚のふすまには、祖父の少年時代、ある雪の日にその兄弟四人の作った詩がそれぞれ書いてあり、雪の朝など、私は暖かいふとんに包まれたまま、母がつぎつぎとそれらの詩をさも楽しそうに口ずさむのをわけがわからぬなりに快く聞き入っていたものでした。

しつけ

10 私の母は茶の湯の形式はどうでもいいが、あれをやると動作が落ち着き、戸障子を荒々しくあげたてしたり、さら・小ばちをがちゃがちゃいわせたりしなくなるから家の中が静かでよい、というので私の子供のころは女中もませて、お茶の先生が来てはよくおけいこをしたものです。茶の湯をやるといなか出の女中もどたばた廊下を走ったりせず、おちゃわんをこわすことがあまりなくなつたそうです。女中や女の子はもとより、兄までお相伴をさせられたものですが、兄はお菓子が出ると、母が向こうを向いてお茶をたてている暇に、それをつまんでスー

【四九頁】

1 つと消えてしまうので、女中たちは笑いかみ殺すのに骨を折りました。私の父も不味公のおひざもと松江のもので、家老の家に奉公中仕込まれたのでお茶は名人だつたそうですが、私は父のお手前を一度も見ただけではありません。

2 父も母も道具好きで、そのせいか母は道具の扱いがやかましく、立ち居ふるまいやことばづかいもきびしい方でした。ことばについては特に「はい」とか「いいえ」とかいう返事をはっきりすること、語尾をはっきりと、決して聞きがちがえられることのないように言えといつも言

人が多かったものです。殊に東京弁にばれた耳には西の方のことはは齒されがわるくて聞きとりにくかつたせいでしょう。母は父の郷里から出てくる松江の人々の言葉を言葉尻がきえてしまつてわけがわからないといやがりました。父は父で関東弁、特に母の郷里の水戸弁をけなし、

「水戸つぼのことは何だ、ガークキャンク、かつて尻上りでまるで猿が犬がケンカしてゐる通りだ。ありや人間の言葉じやない、動物の言葉だ」

などでやつつたものです。母はまた言葉と同様、動作もハキ／＼しないと気にいらないうちで、呼ばれたら返事といつしよに立つものだ、返事より先に立てというくらいだ、といつて、ナマ返事をしたり、返事だけして立ち方が遅れると、女中でも子供でもピン／＼叱られました。

母は口やかましい方ではなく、口数は少ない方でしたが手は早かつたものです。何のためにあんなめにあつたのか、原因は一つも覚えませんが、黙つていていきなりピンリと叩かれたり、キュツとつねられたり、時にはお灸をすえられたりしたこともあります。ただし末っ子の妹だけはこの難をまぬかれたようですが、よく手をついて悪うございましたとあやまれ、といわれ、それがいやでいつまでも親と根比べ、強情のはりあいで子供は泣きたて、隣からお種さんまでとんできてあやまつたりとなりなしてくれたりしたことがあります。ついこの頃、荒畑寒村氏とこんな話をしたら、あれはいやですね、といわれるこのいやさに同感しておられました。あの時代にはどこの親もやつたものなのでしょう。私の今いる村のお百姓のお爺さんも自分の孫の頭をなでなぐりました。

「今の子供は親がぶたねえだからいたすらでなんねえ。おらがの子供の時分にはよくぶたれたもんよ、ぶたれたり灸をすえられたり。泣き声がえらいんで隣のおばさんがかけつけておらがが代つてあやまつてやつからなんてね、こつちも子供だからおばさんがあやまつてくれてありがたい、嬉しいなんて思つたもんだが、よく考えてみるとはからしい。ぶたれたり灸をすえられたりする前にきてあやまつてくれたら有難かつたろうが、やられちまつたあとであやまつたつて仕方がねえ、今気がついても六十年前だからまにあわねえがねえ」

全く同感ですが、こういう時代的特色は、文字のある階級もない階級もあまりちがわなかつたようです。も一つ、おしおきには暗い所にいれられました。私の家では客用の便所の入口

⑦ われました。今と違つて、私の子供の時代にはイエスとノーのはつきりしない女の人が多かつたものです。

⑧ 母はまたことばと同様、動作もきびきびしないと気に入らないたちで、呼ばれたら返事といつしよに立つものだ、返事より先に立てというくらいだ、と言つて、生返事をしたり、返事だつて立てたのが遅れたりすると、女中でも子供でもびしびしかられました。

⑨ 母はまた姿勢の悪いのがきらいで、子供たちにも前かがみになるのを戒め、自分も一生しゃんとしてました。いったいに昔の侍は姿勢がよかつたそつで、そつていえば母の父も、そのほか侍だつた老人たちは皆行儀もよく、姿勢もよかつたと思います。

⑩ 母は口やかましい方ではなく、口数は少ない方でしたが手は早かつたものです。なんのためにあんなめに会つたのか、原因は一つも覚えませんが、黙つていていきなりピンリとたたかれました。

【五〇頁】

- ① たり、きゅつとつねられたり、時にはおきゅうをすえられたりしたこともあります。ただし末っ子の妹だけはこの難を免れたようですが、手をついて「悪うございました。」とあやまれ、といわれ、それがいやでいつまでも親と子と根比べ、強情の張りあいで子供は泣きたて、隣からお種さんまでとんできてあやまつたりとなりなしてくれたりしたものです。あの時代にはどこの親もやつたものなのでしょう。私の今いる村のお百姓のおじいさんと、いつか畑のそばで日なたほっこをしながら世間話をしていた時、おじいさんは自分の孫の頭をなでながら言いました。
- ② 「今の子供は親がぶたねえだからいたすらでなんねえ。おらがの子供の時分にはよくぶたれたもんよ、ぶたれたりきゅうをすえられたり。泣き声がえらいんで隣のおばさんが駆けつけて、おらがが代わつてあやまつてやつからなんて言つてね、こつちも子供だからおばさんがあやまつてくれてありがたい、うれしいなんて思つたもんだが、よく考えてみるとはからしい。
- ③ ぶたれたり、きゅうすえられたりする前に来てあやまつてくれたらありがたいがたかつたろうが、やられちまつたあとであやまつたつて仕方がねえ、今気がついても六十年も前のことだからまにあわねえがねえ。」
- ④ 全く同感ですが、こういう時代的特色は、お百姓の家でも、都会の文字のある家庭でもあま

に平生は鍵がかかっており、その中に三尺四方の板の間があり、そのうしろは隣との境で細い通路になり、三

尺ばかりの開きの扉のついた窓になっていました。その窓は昼間はあけて、夜は中から鍵がかかっていました。この牢屋も妹だけは経験しなかったことですが、上三人の子供はよくいれられました。後年母が笑い話に、三人三様でおかしかった、というのは、姉は小さい時ただ泣きが得意で有名、或時など余り泣いて押入れへ入れられたのを、母の妹が来て助け出した。ところがそれで泣きやむどころ所か、ますます泣きつのはしてがないので、とうとう助け出した叔母が、又もと通り押入れへ入れて帰っていたくらい。また姉が初めて小学校へ上った時、一人の女の先生が、

「私はあなたをよく知っていますよ。私があなたの家の前を通るといつでも赤い着物を着て、門のところで大きな声で泣いていましたね。」といわれたと姉自身よく笑い話をしたものです。その姉が例の牢屋へ入れられるとき大変、夜というのにありつたけの声をして根気よく叫びつづける。宵の中から人通りもない山の手の邸町のシンとした中にとめどなく泣きたてるので、近所に外間がわるくて打捨ておけなかつたというのです。また私の方は生来いたつて闘争的でない、あきらめのいいたちですから、入れられたが最後、ひっそりと音もたてない、心配になるくらい。しばらくすると中から声が出て、「あしたの朝になったらあけてくださいね、今夜はここにいますからね」という。そうなるかわいそうで打ち

「あしたの朝になったらあけてくださいね、今夜はここにいますからね」という。そうなるかわいそうで打ち

やつておけなくなるので出してしまっ、というのでした。兄は兄で、裏に向つた窓の鍵はずしてほそいじへとびおり、はだして台所の方へまわつてのこく家へ上つてきたので、これまた親の負けだつたそうです。尤もその鍵は姉でも私でもはずせないわけではないので、どうしてそこに気がつかかなかつたのか、女の子にはそれだけの積極性がなかつたものかとも思います。兄は男だけに母の手では抑えられず、ぶつてやろうと思えばサツとにげる、

⑮ り違わなかつたようです。も一つ、おしおきには暗い所に入れられました。私の家では客用の便所の入口に平生はかぎがかかっており、その中に三尺四方の板の間があり、そのうしろ、三

【五二頁】

① 尺ばかりの開きのとびらのついた窓の外は隣との境で細い通路になっていました。その窓は昼間はあけて、夜は中からかぎがかかっていました。この牢屋も妹だけは経験しなかったことですが、上三人の子供はよく入れられました。後年母が笑い話に、三人三様でおかしかった、というの、姉は小さい時叔母に甘やかされたせいか、ただ泣きが得意で有名、ある時などあまり泣いて押し入れへ入れられたのを、母の妹が来て助け出した。ところがそれで泣きやむどころか、ますます泣きつのは果てがないので、とうとう助け出したおばが、またもとどおり押し入れへ入れて帰っていったそうです。また姉が初めて小学校へ上がった時、ある女の先生が、

⑧ 「私はあなたをよく知っていますよ。私があなたの家の前を通るといつでも赤い着物を着て、門のところで大きな声で泣いていましたね。」と言われたと姉自身よく笑いながら話したものです。その姉が例の牢屋へ入れられるときあたひへん、夜というのにありつたけの声をして根気よく叫びつづける。よいのうちから人通りもない山の手の屋敷町のしんとした中にとめどなく泣きたてるので、近所に悪くてうつつやつておけなかつたというのです。また私の方は生来いたつて闘争的でない、あきらめのいいたちでしたから、入れられたが最後、ひっそりと音もたてない、どうしたのかと心配になるくらい。しばらくすると中から声が出て、「あしたの朝になったらあけてくださいね。今夜はここにいますからね。」そうなるかわいそうであつた

【五三頁】

① やつておけなくなるので出してしまっ。」と母は言いました。兄は兄で、牢に入れられるが早いか窓のかぎをはずして裏の露地へとびおり、はだして台所の方へまわつてのこの家へ上がつてきたので、これまた親の負けだつたそうです。もつともそのかぎは戸の内側についていたので、姉でも私でもはずせないわけではないのに、どうしてそこに気がつかかなかつたのか、女の

追いかけると庭へとびおりた拍子に、そこにあるげたをもつて逃げてしまうので、はだしては追いかけることもできなくなつたと、母は後年よく笑つて話しました。

薄給の一技術家に甘んじられない父が企業家になろうとあせつた失敗から、年毎に家計は苦しくなり、母の苦勞は見るに忍びないものがありました。その中で母は次々と父の親戚の世話までよく努めました。人の二倍は働く精力家でもおい／＼子供にかまけている暇がなく、私にとつては姉が母代りでもあり師でも友でもありました。その頃は映画も音楽も知られず、夏休みなど友達の中に避暑や水泳に行く者も殆どなく、家にいれば働くよりほかにすることはなかつたのですから親も助かつたわけです。

小学時代

姉は母が結婚後八年もたつて始めて授かつた初子でしたし、兄も最初の只一人の男の子、妹は未子、とそれ／＼珍重かられる視覚をもつていたにひきかえ、私は第三子でしかも二度めの女の子であり、至つて無口で、始終いるかいないか分からないといわれていたくらいですから、母からよく「忘れていゝうちに一人で育つてしまつた。こんなに世話のない子はない」といわれたものです。

私の姉と兄とは番町小学校の付属幼稚園へ通い、その履歴があつたのでお生まれながら数え年七つで番町小学校へはいりました。私は幼稚園の代わりに招魂社の馬場裏、遊就館に近い細い道に面した富花学校というささやかな私立学校に満五歳の冬から入れられました。それは公立の小学校がまだ発達しなかつた頃、それを補つていた寺小屋式の私立学校の最後の姿の一つでした。建物は安つばい洋館で二階は何に使つていたものか、階下の一室を黒板を境に二つにしきり、一方には二年生、男女併せて十何人か。他方には一年生、これは女ばかりだつたと思ひますがほん

の六七人だつたでしょう。髪をイギリス巻きにしたきれいな女の先生が、たいてい両方のクラスをうけもち、男の先生もひとりいたように思ひますが、ハツキリ覚えません。私はそれまで家で野放しに育てられ、文字というものは一字知らず、筆など持つたこともなかつたのが、いきなり年上の、半年以上も前から学校生活になれ、読むことも書くことも、数えることもできる子供たちの間につつまれたのですから全く途方にくれました。人なつこい、社

- ⑤ 子にはそれだけの積極性がなかつたものかと不思議に思ひます。兄は男だけに母の手では押さ
- ⑥ えられず、ぶつてやろうと思えばさつと逃げる、追いかけると庭へとびおりたとたんに、そこ
- ⑦ にあるげたを持つて逃げてしまうので、はだしては追いかけることもできなかつたと、母は後
- ⑧ 年よく笑つて話しました。

⑨

小学時代

- ⑩ 私の姉と兄とは番町小学校の付属幼稚園へ通い、その履歴があつたのでお生まれながら数
- ⑪ え年七つで番町小学校へはいりました。私は幼稚園の代わりに招魂社の馬場裏にあつた、富花
- ⑫ 学校というささやかな私立学校に満五歳の冬から入れられました。それは公立の小学校がまだ
- ⑬ 発達しなかつたころ、それを補つていた寺小屋式の私立学校の最後の姿の一つでした。建物は
- ⑭ 安つばい洋館で二階は何に使つていたものか、階下の一室を黒板を境に二つにしきり、一方に
- ⑮ は二年生、男女合わせて十何人か。他方には一年生、これは女ばかりだつたと思ひますがほん

【五三頁】

- ① の六七人だつたでしょう。髪をイギリス巻きにしたきれいな女の先生が、たいてい両方のクラ
- ② スを受け持ち、男の先生もひとりみえたように思ひますが、はつきり覚えません。私はそれま
- ③ で家で野放しに育てられ、文字というものは一字も知らず、筆など持つたこともなかつたのが、
- ④ いきなり半年以上も前から学校生活に慣れ、読むことも書くことも、数えることもできる子供
- ⑤ たちの間につつまれたのですから全く途方にくれました。人なつこい、社交性に富んだ子な

交性に富んだ子ならそれでも早くなじんだでしょうが、至つて無口で内気な、一人でいて退屈することも淋しいことも知らずに育つた私でしたから、ふいに人の中につきだされたには全くめんくらいました。同級の子供たちは、三番町の一口坂上の商人、私の家へ出入りする八百や酒や荒物やなどの娘たちで、おたがいにおわかちゃん、およつちゃんといふあう仲のものばかり。私だけは皆からお嬢さんと呼ばれており、みんなで親切にしてくれましたが、このお嬢さんの無能ぶりは全く木か石といつていいくらい。運動場代わりの招魂社の馬場で、列を作つて右向けといわれても、左向けといわれてもどうしていいかわからず、一々おわかちゃんやおよつちゃんのせわになるばかり。習字の時は、硯も墨も紙もチャンと揃つてもつていながら、今でもその墨には司馬温公でしたるか、子供がカメにおちて溺れようとするのを、とつさの機転でそのカメをわつて救い出す絵がかいてあつたので覚えていますが、その墨や筆をつかうことができず、てんで字というものの書き方が分らないので、

石みたいに固く凍つたような気持でした。そうした気おくれは只さえ内気な私をますますくじけさせたのでしよう、私は教師や友達の前で自分の意思を発表する勇氣を長く失つていました。母にいわせるとあの学校へはたゞ履歷をつけるためにやつただけで、何も覚えないうでよかつたのだ、というのですが、子供の心理はそれではすみません。全く不用意に慣れない環境にほうり出されて、自分より遙かに進んだ人々の中に只一人置かれる苦痛、その圧迫感、私の人生の第一歩における失敗だつたと思います。しかし私はこの苦痛を誰にも訴えたことはなく、たゞ一人で苦しみました。

私には妹があつたので母に抱きおぶかかいされた覚えがありません。隣にいた祖父の妾おたねさんにおぶわれたり、おぶるにいれられたりした覚えはあるのですが、また長屋にいた伊藤という警部の細君おかねさんというのが毎日私の家へ手伝いにきており、子なしのせいか私を妻孥つまごのようにかわいがり、よそへ越した後までつれにきて遊ばせてくれたくらいで、その人につきそわれて学校へいき、雨の日はおぶかかわれていたことを覚えていますが、母にはそういう世話になつた覚えがありません。また私は母をはじめ誰にも甘えたり、ねだつたり、訴えたりすることの全くない子で、痛くても痒くても黙つてがまんするたちでしたから、すなおでおとなしくいて、とほめられた代り、内心の苦勞をどうしてもらうこともできずにいました。番町小学校にはその翌年明治二十九年に算年七つ、まんの五歳ではいりまし

- ⑥ らそれでも早くなじんだでしょうが、私はいたつて無口で内気な、ひとりでいて退屈すること
- ⑦ も寂しいことも知らずに育つた子でしたから、不意に人の中につき出されて全くめんくらいま
- ⑧ した。同級の子供たちは、三番町の一口坂上の商人、私の家へ出入りするやお屋・酒屋・荒物
- ⑨ 屋などの娘たちで、お互におわかちゃん、およつちゃんと呼びあう遊び仲間のものばかり。私
- ⑩ はただ勤め人の子だというだけでお嬢さんと呼ばれ、みんなで親切にしてくれましたが、この
- ⑪ お嬢さんの無能ぶりときたら全く木か石といつていいくらい。運動場代わりの招魂社の馬場で、
- ⑫ 列を作つて右向けといわれても、左向けといわれてもどうしていいかわからず、一々おわかち
- ⑬ ちゃんやおよつちゃんの世話になるばかり。習字の時は、すずりも墨も紙もちゃんとそろえて持
- ⑭ つていながら、——その墨には司馬温公でしたか、子供がカメに落ちておぼれようとするのを、
- ⑮ とつさの機転でそのカメを割つて救い出す絵がかいてあつたのを今でも覚えていますが——そ
- ⑯ の墨や筆の使い方を知らず、てんで字というものの書き方がわからないので、なんでも知っ

【五四頁】

- ① ていて、なんでもさつさとやつてのける先輩たちの中でただひとり石みたいに固くなつていま
- ② した。そうした気おくれはたださえ内気な私をますますいじけさせたのでしよう、私は教師や
- ③ 友だちの前で自分の意思を発表する勇氣を長く失つていました。おとなになってから母にそれ
- ④ を話したら、あの学校へはただ履歷をつけるためにやつただけなので、何も覚えないうでよ
- ⑤ かつたのだ、というのですが、子供の心理はそれではすみません。全く不用意に慣れない環境
- ⑥ にほうり出されて、自分よりはるかに進んだ人々の中にただひとり置かれる苦痛、その圧迫感
- ⑦ は、私の人生の第一歩における失敗だつたと思います。しかし私はこの苦痛をだれにも訴えた
- ⑧ ことはなく、たゞひとりで苦しみました。

- ⑨ 番町小学校にはその翌年明治二十九年に算年七つではいりましたが、富化学校時代の癖
- ⑩ がついたのでしよう、本も読め、算術もわかるようにはなつていても、どうしても手をあげる

たが、富化学校時代の癖がついたのでしよう、本もよめ、算術もわかるようにはなつていても、どうしても手をあげる勇気が出ませんでした。名をさされても答えることができませんでした。富化学校では先生が私を特別扱いし、いつも仲間はずれで——それは同情から出たことにはちがいないのですが、——何も聞かず、ソツとおかれた癖がついて、極端に心理的に発表の能力と習慣が抑えられてしまったものです。しかし年とともに、いわば凍った地面も春と共にとけて、やわらかい草木の芽をのぞかせるように、私のいじけた心にも春の光がぎざし始めました。自分の実

力に知らず知らず幾分の自信をもち発表の要求をもち始めたのです。尋常二年の末頃まで、私に本をよみ答えをさせる機会を与えず、私は当然よまないもの、答えないものときめて、順番がきても私だけとはばして次の人にあてるのが受持の先生の習いでしたが、そういう時追々に私は今日は読もう、今日こそは答えようとその瞬間をまちかまえているのですが、つい立ちそびれている間に、先生はためらうことなく次の人をさしているのです。最後に或日捨て身の勇気をふるいおこして、いつもの通り先生が私をさして次の人をさそうとする瞬間、私は立つてハッキリした声で本をよみました。先生も友達もあつけにとられ、みんな私の方をふりむいて顔を見合せているのです。唾が口をきいたか、死んだ者が声をたてたか、何にしても奇跡をみたようなおどろきでした。この頃はまた父兄会もなく、先生の家庭訪問もなく、参観人としては小学校の六年間を通じ、私の母が只一度、他の用で来た序に教室をのぞいてみただけで誰一人きたことはありませんでした。生徒は一室七八十名に余り、教師は中年で顔面の冴えない人々でした。同級生の中には後に学習院へいった連中を中心とする上流の娘が七、八人あり、これがクラスの花形で先生のお気に入り、先生を家庭教師につけているのまでであり、発表の機会はその連中で独占し、他はあれどもなきが如く、私のように無視されるのはまたよい方で、尋常三、四学年の二年間つづけて受持だったカラスと男の子がらあだ名された女の先生など、上流の子には女中の如くへつらい、貧しくきたない子には目立つてじやけんにしました。

高等一年——今の尋常五年になった時、受持が変つて、私の姉が赤いききもので毎日泣いていた話をしたあの女の先生となり、前の先生よりズツと上品で静かでやさしく、ゆき届いた人だったの

- ⑪ 勇気が出ず、名をさされても答えることができませんでした。富化学校では先生が遅れていた私を特別扱いし、人並に進める代わりにいつも仲間はずれにして、——それは同情から出たことにはちがいないのですが、——何も聞かず、ソツとおかれた癖がついて、極端に心理的に発表の能力と習慣が抑えられてしまったものでしょう。しかし年とともに、いわば凍った地面も春とともに溶けて、柔らかな草木の芽をのぞかせるように、私のいじけた心にも春の光がぎざしはじめました。私は自分よりできない子でも答えるのに刺激されて、自分の実

【五頁】

- ① 力に知らず知らずいくぶんの自信を持ち、発表の要求を持ちはじめたのです。尋常二年の末ごろまで受持だった年寄りの男の先生は、私に本を読み、答をさせる機会を与えず、私という子が当然読まないもの、答えないものと決めて、順番が来ても私だけとはばして次の人にあてるのが習いでした。そういう時、おいおいに私はきょうは読もう、きょうこそは答えようとその瞬間を待ちかまえているのですが、先生はその機会を与えず、ためらうことなく次の人をさしてしまいました。最後にある日、捨て身の勇気を振るい起して、いつものとおり先生が私をさして次の人をさそうとする瞬間、私は立つてはつきりした声で本を読みました。先生も友達もあつけにとられ、みんな私の方を振りむいて顔を見合せているのです。おしが口をきいたか、死んだものが声をたてたか、何にしても奇跡を見たような驚きでした。このころはまたPTAもなく、先生の家庭訪問もなく、参観人としては小学校の六年間を通じて私の母がただ一度、他の用で来たついでに教室をのぞいてみただけでだれひとり来たことはないくらいでした。生徒は一組七八十名に余り、教師は中年で顔面のさえない人々でした。男の先生は和服に小倉はかま、女の先生は丸まげにえび茶か黒のはかま、帯をおたいこに締めている先生もありました。

- ⑫ 高等一年——今の尋常五年になった時、私の姉が赤い着物で毎日泣いていた話をしたあの女の先生の受持となりました。前の先生よりズツと上品で静かで優しく、行き届いた人だったの

で生徒は仕合せでした。高等二年になるとまた受持が変わって東京府立第二高女の補習科を出たばかりの十九歳の若いお嬢さんと、至つて快活な、無造作な人でした。唐人髷に紫がすりのきもの、大きな声で笑つたり、話したり、教室は急に春のように晴れくりました。陰気なかげほどこかへふつとんだ形です。私は相変らずむつりしていたので、その先生は同じ学校の後輩である私の姉に向かつて、「あなたの妹さん嘩かと思つてたらこの間始めて友達と話をしているのを見てびっくりした」といつたそうです。

この頃は学校でまだ催し物もなければクラス会もなく、電車もバスもない時代ですから、尋常一、二年生は、つい近くの山王さまに遠足に行くのが一年に一度の大事件でした。三年以上は戸山ヶ原に出かけてそこで秋の大運動会をやりました。まだ暗いうちにおきて学校で勢揃いをし、行列をくんで戸山ヶ原までいくのが、大層遅くだったような気がしています。両側田圃の細い田舎道を砂ほこりを蹴たて、ゾロゾロワイワイ長い子供の列が行く。みのりの秋にそここの道ばたに女がああ歯をさかさまにしたような古風な稲こき器で稲をこいていたのを感じています。

高等一年の時、例のお嬢さん先生の発意で初めて一人ずつ皆の前に立つてお話をすることになりました。こんな時も、名をさされて臆せず出ていつて話をするのは上流グループの人ばかりです。何分子供のよみものも少く、多少出ていてもそんなものをよんでいる者はいくらも

ない時代でしたから、だれも人前で話す用意もなかったのです。

こんな風に新しい空気はいくぶん吹きこまれても、教育の精神そのものは昔のままでした。図画は写生など聞いたこともなく、日本画のお手本を習うばかり、作文は候文と記事文とで候文の方は『出産祝いに物を送る文』『下女の周旋を頼む文』などと子供の生活とは縁のない題が出されましたが、『蜜蜂に友を誘う文』『もみじ狩に友を誘う文』などとくると、ますます途方にくれました。蜜蜂に友を誘う所か、夕方からはしめきつた門の中でしか遊ぶことを許されず、学校と家との間しか道を知らない子供がどこへもみじ狩に行かれるでしょう。けれども先生が与える文例に倣つて皆がともかくも作文をデッチあげたからえらいもので

【五六頁】

- ①で生徒はしあわせでした。高等二年になるとまた受持が変わって学校を出たての十九歳の若い
- ②お嬢さんと、いたつて快活な、無造作な人でした。唐人まげに赤いふりをのぞかせた紫がすりの着物、大きな声で笑つたり、話したり、教室は急に春のようにはれぱれしました。私は生ま
- ③れつき口の重いたちだったので、その先生は前からよく知っていた私の姉に向かつて、「あなた
- ④の妹さんおしかと思つてたら、この間初めて友だちと話をしているのを見てびっくりした。」
- ⑤と言つたそうです。
- ⑥このころは学校でまだ催し物もなければクラス会もなく、町には電車もバスもない時代でし
- ⑦たから、尋常一二年生は、つい近くの山王様に遠足に行くのが一年に一度の大事件でした。三
- ⑧年以上は戸山ヶ原に出かけてそこで秋の大運動会をやりました。まだ暗いうちに起きて学校で
- ⑨勢ぞろいをし、行列を組んで戸山ヶ原まで行くのが、たいそう遅くだったような気がしていま
- ⑩す。両側たんぼの細いなか道を砂ほこりをけたてて、ぞろぞろわいわい長い子供の列が行く。
- ⑪みのりの秋にそここの道ばたに、女たちがああ歯をさかさまにしたような古風な稲こ
- ⑫き器で稲をこいていたのを感じています。
- ⑬高等二年の時、例のお嬢さん先生の発意で初めてひとりずつ皆の前に立つてお話をすること
- ⑭になりました。こんな時も、名をさされて臆せず出ていつて話をするのは特定の人ばかりでし
- ⑮た。なにぶん子供の読み物も少く、多少出ていてもそんなものをよんでいるものはいくらも

【五七頁】

- ①ない時代でしたから、だれも人前で話す用意もなかったのです。
- ②こんなふう
- ③に新しい空気はいくぶん吹きこまれても、教育の精神そのものは昔のまま
- ④で、図画は写生など聞いたこともなく、日本画のお手本を習うばかり、作文は候文と記事文と
- ⑤で、候文の方は「出産祝いに物を送る文」「下女の周旋を頼む文」などと、子供の生活とは
- ⑥縁のない題が出されました。また「ぼたる狩に友を誘う文」「もみじ狩に友を誘う文」などと
- ⑦来ると、ますます途方にくれました。ぼたる狩に友を誘うところか、夕方からはしめきつた門
- ⑧の中でしか遊ぶことを許されず、学校と家との間しか道を知らない子供が、どこへ友だちと誘
- ⑨いあつてか
- ⑩つてもみじ狩やぼたる狩に行かれるでしょう。けれども先生が与える文例に習つ

す。私には小学校時代好きな学課も得意な学課もなく、どれも一様に乙ばかり、甚だ引き立たない生徒でしたが、姉の場合とちがつて母は無関心でした。私はおさらにも予習もしたことがなく、家庭でも何一つ教わりもせず、よそに習いにやられることもなく、学課に関する限り全く野放しで育ちました。

女学校とその後

そのうち女学校へはいる時も近くなりました。姉の時は母が心配でいろいろ問い合せたり願書を持ち歩いたりしたものだそうですが、私の時は、東京府立第二高女へ行っていた姉がその事務所へ願書を出してくれただけで、私自身も家の者も何とも思わずにいううちに試験の日がきて無事にパスしました。あとで聞くと大変な入学難だったそうで、番町小学校の同級生の中からは私のほかに三人だけはいり、いずれも優等生で勉強家ばかりでしたから平生成績のよくない私がパスしたには先生も友達もびっくりしたことをあとで知りました。女学校へはいつてからも相変わらず振わず、たゞこゝで始めて覚えたテニスが気に入って、まるでテニスをするために五年間通学したようなものでした。今思うと実にもつたいないことをしたと思いますが、学課は怠け放棄、殊に数学や理科はまるで毛嫌いして落第しなかつたのがふしぎでした。

一年の時の英語の先生は青木先生という江戸つ子のおばあさんで、まことに陽気な面白い人でした。実に発音のきれいな、声の美しい人で、生徒の英語をおもしろおかしく冷やかしたり茶化したりしながら上手に教えるので、いくも直されても苦にならず、級中誰一人英語の時間を喜ばないものではありませんでした。ところが二年になるとその人気者の先生の姿はみえず、うすぎたない格好の頭の上げたお爺さんがその代りにきているではありませんか。おばあさんではあつてもおしやれで身ぎれいで、いかにも気のきいた江戸つ子の青木先生をおいだしてこのジジムサイ陰気な、しかも発音ときたら全くめちやくやなおじいさいんをつれてきた校長の乱暴にみな憤慨しました。英語は発音しだいのもの。それがこんなでは一ぺんに英語熱がさめてしまったのもむりではありません。こんどの先生は実力でなく、トラカンでごまかせる先生だったのでみなそれをやり出しました。五年の時はナシヨナルを次次

- ⑨ て皆がともかくも作文をでつちあげたからえらいものです。私には小学校時代好きな学課も得意な学課もなく、どれも一様に乙ばかり、おさらにも予習もしたことがなく、家庭でも何一つ教わりもせず、他所に習いにやられることもなく、学課に関する限り全く野放しで育ちました。
- ⑩ そして祖父の家の物置で、ふりがなつきの古新聞の講談を読みあさり、姉や兄のお古の「少年世界」を目次まで諳誦するほどくり返して読むばかりでした。友だちから「小公子」を借りて読んだのもそのころでした。

女学校とその後

【五八頁】

- ① そのうち女学校へはいる時も近くなりました。姉の時は母が心配でいろいろ問い合せたり願書を持ち歩いたりしたものだそうですが、私の時は、東京府立第二高女へ行っていた姉がその事務所へ願書を出してくれただけで、私自身も家のものもなんとも思わずにいううちに試験の日がきて無事にパスしました。あとで聞くとたいへんな入学難だったそうで、番町小学校の同級生の中からは私のほかに三人だけはいり、その三人はいずれも優等生で勉強家ばかりでしたから、平生成績のよくない私がパスしたには先生も友達もびっくりしてまちがいだと思つたそうです。
- ② 女学校へはいつてからも相変わらず振るわず、ただこゝで初めて覚えたテニスが気に入って、まるでテニスをするために五年間通学したようなものでした。今思うと実にもつたいないことをしたと思いますが、学課はなまけほうだい、ことに数学や理科はまるでけぎらいして落第しなかつたのが不思議でした。
- ③ そのころ、私はテニスの暇には日本の古典を読み、とりわけ「枕草子」が気に入って、くり返すばかりでは飽きたらず、書き写したことでありました。「源氏物語湖月抄」「枕草子春曙抄」などは姉が持っていたのでした。このほかに唯一の総合雑誌「太陽」を毎月親戚のものが貸してくれ、それでトルストイの小説の翻訳なども読みました。

とまわして訳をつけて間に合わせたのですから、実力は二年以来同じ所にとまっています。

丁度この頃同じ東京の府立第一には鈴木のおぶ子女史が音楽の先生をしておられ、その影響で柳兼子、立松房子その他すぐれた音楽家が多勢出たのですが、府立第二には音楽家など一人も出さなかつたのも、先生が振わなかつたことまるきり無関係ではなかつたでしょう。

私は学校が退屈で面白くないので、四年の時にやめたいと思い、ひとりの友達に漏ら

したところ、卒業しなければ損だからと止められ、また受持の先生にもいろいろ悦諭されて思いとまりました。学校では裁縫が嫌いでたび／＼文句をいわれ、それではお嫁に行かれないとか、そうへんくつでは円満な家庭は作れないとか、二た言めにはお嫁だの家庭だのとうるさくいわれるのが実にいやでした。私は小学校時代には日清戦争のあと、日露戦争前の軍国気分におおられて看護婦になつて従軍する覚悟で、愛国心にもえていたのですが、女学校にはいつた頃にはいつともなくぬぐつたようにその夢を忘れていました。ちょうど女学校三、四年の頃が日露戦争で慰問袋を慰問えはがきなども送つたのですが、戦争には特に感激もせず、賑やかなことのすきな父につれられてよく提灯を見物に出かけ、お祭気分を味つただけでした。が、学校でうるさく賢母良妻を強調されるにつれて、私は職業をもつ決心をいつとなく固めていました。職業さえもば裁縫なんか自分でしなくても人にさせれば十分ではないか、何だつて嫌いなことをむりにやる必要があるんだという反抗心がもり上つてきました。そこで私は最も手近かな独立の方法として女学校を出たら二年間に国漢文の中等教員の資格をとり、あと三年間で英語をやろうという五カ年計画をたてました。姉にも母にも相談せずひとりでこうきめて、しかも正規の学校は面倒くさいと思い、独学と夜学でやるつもりでした。ところが女学校を出て国漢文の準備にとりかかつた時、世は日露戦後自然主義の勃興期で、とてもそんなまどろしいことはしんぼつです。

初志をすて、卒業後一年半で津田へはいつたのです。これもまぎ／＼くつだからはいたりた／＼なく、

外をまぎ／＼ついたあげく、やむをえずあきらめていつたものの、英語一点ばりでは単調で面白

⑬ 私は学校が退屈でおもしろくないので、四年の時にやめたいと思い、ひとりの友だちに漏ら

【五九頁】

- ① したところ、卒業しなければ損だからと留められ、また受持の先生にもいろいろ悦諭されて思いとまりました。学校では私の裁縫きらいが先生のお気に召さず、それではお嫁に行かれないとか、円満な家庭が作れないとか、まだ結婚も家庭も考えない子供をつかまえて、ふたことめにはお嫁だの家庭だのとうるさくいわれるのがいやで行きたくなかつたのです。私は小学校時代には日清戦争のあと、日露戦争前の軍国気分におおられて看護婦になつて従軍する覚悟で、愛国心に燃えていたのですが、女学校にはいつたころにはいつともなくぬぐつたようにその夢を忘れていました。ちょうど女学校三、四年のころが日露戦争で、慰問袋や慰問絵はがきなども送つたのですが、戦争には特に感激も持たず、にぎやかなことの好きな父に連れられてよくちようちん行列を見物に出かけ、お祭気分を味つただけでした。が、学校でうるさく賢母良妻主義を強調されるにつれて、私は職業を持つ決心をいつとなく固めていました。職業さえもば裁縫なんか自分でしなくても人にさせれば十分ではないか、なんだつてきらいでへたなことを無理にやる必要があるんだという反抗心が盛りあがってきました。そこで私は最も手近かな独立の方法として女学校を出たら二年間に国漢文の中等教員の資格をとり、あと三年間で英語をやろうという五カ年計画を立てました。姉にも母にも相談せずひとりでこう決めて、しかも正規の学校はめんどうくさいと思い、独学と夜学でやるつもりでした。ところが女学校を出て国漢文の準備にとりかかつた時、世は日露戦後自然主義の勃興期で、労働運動も盛んになり
- ⑫
- ⑪
- ⑩
- ⑨
- ⑧
- ⑦
- ⑥
- ⑤
- ④
- ③
- ②
- ①
- ② 学校をさまよつた末、津田へはいつたのです。これも姉のような模範生でない私には窮屈で向

【六〇頁】

け、古典を静かに学ぶという気になれず。早く外国の本が読みたくて、卒業後一年半あちこち

くなく、途中でやめて大学聴講を志して成らず、私のことは一切干渉せず、何でも好きなようにしておいてくれる母に対し、せめてのお礼心に免状だけでは見せてと思ひ、卒業までしんぼつしたわけでした。そんなわけで最初から免状で食おうとは思っていなかったもので、津田でも師範科をやめて途中から選科に変わり、中等教員の資格を棒にふって自由な時間を多くしました。

小学校から専門学校まで、あの時代の学校は形式主義で、詰め込み主義で実に面白くないものでした。人は学生時代の楽しい思い出などありますが、私にはそんな気はしません。たえず現状に不満で、しかもどこに何を求めていいかわからず、くらやみを手さぐりするような、はがゆいじりくする気持で耕さるべき力を耕されず、二度と返らぬ青年期をむだにすごしたことがばかりくやまれます。あらゆる本がありあらゆる機会が与えられている今の若い人は何と希望の多いことでしょう。

人力のほか乗物はなく、ガスも水道もミシンもない頃には家庭の用も多く、母は殆ど外出することがなく子供をつれて外へ出るのは青山へ祖母の墓参の時ぐらいのものでした。多摩川へ鮎狩、大森へ潮干狩などにつれていつたのも父ばかりで、母は若い女中に機会を譲りました。私たちがよつたが只一度両親揃つての旅をしたのは一と夏栃木県の温泉へ出かけた時だけでした。父は道具すきとはいってもたゞ買うのを喜ぶだけでしたが、母はそれを大切にしてお正月やお客の時に出しては眺めて心から楽しむ風でした。私が女学校一年の時、母は一度姉と私をつれて博物館にいきましたが、この時から私は博物館がすきになり、日曜にはよくひとり出かけて美しい工芸品、とりわけ漆器や陶磁器、仏像などを眺め入る楽しみを覚えめました。

田舎侍の気分の強かつたその頃の山の中流の家庭では、新聞小説も女の子には禁物芝居や奇席は以ての外というのが普通でした。私の家では読み物は自由でしたが、芝居や奇席は父が好きで、二度つれていかれたきりでした。これは世間一般の風潮でもあれば、貧しくてそんな余裕のなかつたことも原因でしたらう。従つて家庭と学校のほかは図書館や博物館というような金のかゝらぬところに楽しみを求めるほかはなかつたのです。

③ かないと知っていたのですが、なかなかほかで基礎的な学力がつかないので、やむを得ずあきらめてはいったものの、英語一点ばかりでは単調でもおもしろくなく、途中でやめて東大の聴講を志しましたが許されませんでした。最初から卒業免状で食おうとは思っていなかったもので、津田でも師範科をやめて途中から選科に変わり、中等教員の資格を棒にふって自由な時間を多くしました。女学校を出た年の秋から馬場狐蝶先生のお宅で、一週一時間くらい、大陸文学の本を読んだり、いろいろなお話を聞いたのはいい勉強になりました。

④ 小学校から専門学校まで、あの時代の学校は形式主義で、詰め込み主義で実におもしろくないものでした。人は学生時代の楽しい思い出などいい、明治時代をたたえる人もありますが、私にはそんな気はしません。絶えず現状に不満で、しかもどこに何を求めていいかわからず、暗やみを手探りするような、歯がゆいじりじりする気持で耕さるべき力を耕されず、二度と返らぬ青年期をむだに過したことが悔まれます。あらゆる本があり、あらゆる機会が与えられている今の若い人はなんと希望の多いことでしょう。

私たちの若い時代がつまらなかつたといつても、それは今の人に比べるからで、私の父や母の時代はもつと気の毒なことでした。私の父は松江藩の足輕の次男坊で、赤貧洗うが如く、九歳から家老の家に奉公し、維新後苦学力行、フランス人の学校で教育をうけ、最も初期の家畜飼養及び貯蔵食品の技師、つまり牛馬の飼育やハム、缶詰の専門家となつた人でした。私の母は代々水戸藩の儒者だつた家に生れ、漢学や裁縫を一通り習つた頃、東京へ一家が移つたので外人の女学校で普通學を、ついで女子師範(後の女高師)の第一期生となり、卒業後父と結婚したのでした。いずれも明治の新しい教育をうけ、藩閥嫌いで欧化主義の影響をうけ、明治十年代には家でも洋服に椅子テーブルで暮していたというハイカラぶりでした。父は中江兆民とフランス人の学校の同窓の後輩で親しく、その自由主義に共鳴はしていましたが、一面見えをかざりたがり、大倉喜八郎、岩谷松平なども交際あり、その花々しい成功と生活ぶりにあこがれているような、低級な立身出世主義者でもありました。母は純潔な理想家で非妥協的な性格でもあり、父が小成に安んじ、放蕩と事業熱に溺れて経済的破綻をきたし、性格的にもすさむに従い、二人の溝は深く大きくなり、家庭は全く母のみを中心としたものになり、教育も母の趣味に偏つてしまいました。父はお祭や縁日、寄席芝居に子供をつれ出すことがすき。多弁で社交的で積極的なところ全く母とちがひ、母の欠点を補うことができた苦ですが、一面体裁屋で浪費家で無責任で家庭の人としては仕末に悪く、子供たちはもとより、父の身内の者まで母に同情し母を信頼し尊敬するばかりでした。成功をあせるほどぬかるみに足をつつこんだ恰好で深くおちこみ、失念のうちに病をえて亡くなつた父の後半生もみじめでしたが、自己犠牲に終始した母の結婚生活もあまりにむごく、この運命的な組み合わせが、私にとっては結婚や家庭についての批判を無意識のうちに育てる大きな力となりました。

あゆみこし道にさわりのものすべて

わがながき世のかてなりしかも

と九十の年に母はよみました。幕末から明治、大正、昭和と一世紀に近い母の一生はその間の日本の苦難と成長を語るような気がします。

4 異同からわかること

教科書本文は、山川菊栄が「特に本教科書のために加筆」したものであるとされているが、実際は加筆部分はそれほど多いわけではなく、圧倒的に削除部分が多いことが確認できる。

原典からの教材化に際し、削除された部分のほとんどは、父母とのエピソードであり、特に母との思い出が多く削られている。

教科書本文においては、山川菊栄が受けてきた教育そのものが語られているのに対し、原典では、母との関係性についても多く語られており、母への尊敬、感謝の念が強く表現されている。

教育理論雑誌と高等学校教科書では、対象となる読者も異なることも当然であり、筆者である山川菊栄本人が「特に本教科書のために加筆」したというのだから、教科書本文は高校生向けに見直しが行われたとも考えることができるであろう。

教材化に際し、これらの意図を含め、この異同表について十分な検討、考察を行い、精査する必要がある。

本稿では、原典に関する情報、異同表の作成にとどまったが、ここで示した課題も含め、教材そのものについての研究の目的となることは当然である。この異同表からは、教科書本文を理解に資することは、いままでもないことである。これらの研究を進めていく上でこの異同表は貴重な資料であると確信する次第である。

ここで述べた課題については、稿を改め論じることとする。

注

- (1) 柳田国男監修『国語 高等学校一年上』東京書籍 昭和二十九年（一九五四）
- (2) 「わが家の商売」（吉野作造）、「本邦における賃仕事」（洪沢敬三）ともに文章末の頭注に原典が示されている。
- (3) 「国語」研究会『「国語」学習指導の研究 高等学校一年全』東京書籍 昭和三十三年（一九五七）一月 三九頁
- (4) 「編集後記」『教育』第三巻第五号 世界評論社 昭和二十四年（一九四九）五月。「MMS」という署名が見られる。

（佐野比呂己 釧路校教授）

（佐野理美 北海道厚岸翔洋高等学校教諭）

附記 本稿は、科研費（21K02428）の研究成果の一部である。

本稿は、佐野比呂己が全体を構想し、佐野理美が補助したものである。